2008年度研究紀要抜粋　「こどもの哲学」を本間先生とともに学ぶ

２００８年度　研推だより　　第３号
学びを創るあなたとわたし　―伝え合う力の育成をめざして－　　08.6.20

「こどもの哲学」を本間先生とともに学ぶ

金澤　正治

この２年間、私はこだわりを持って、この実践に取り組んできました。なぜ、こんなにこだわるのか？とよく考えます。みなさんもしつこいと思っておられるでしょうね。

哲学という学問に対するあこがれがあります。また、あまり日本では実践例がないということにもひかれたのかもしれません。しかし、授業に対する考え方が自分の中で大きく変わったことが大きいと思います。

ネタがあれば、おもしろい授業ができると考えていました。そのためにいろいろな所からネタの情報を得て、様々な実践に自分なりに取り組んできました。けれどもなかなか納得いく授業ができないでいました。

国語の授業をある研究会で参観し、その事後の協議会でその先生が日々大切にして子どもに向き合ってきたことをお聞きし、自分に足りなかったことはこれだと痛切に思うことがありました。その国語の授業は、子どもが先生に自分の気持ちを聞いてほしいという思いが伝わってくるものでした。そして、日々その先生が大切にしてきたことは、『子どもの話をただ丁寧に聴く』ということだけだったのです。

みなさんは、へーそんなことと思うでしょうか。私にはすごく心に響いたのです。私はただ得たネタをつかって、もりあがる授業をしているだけで、子どもの話をその先生のように、穏やかに受け止めて聴いていなかったと心の底から思ったのでした。（今もなかなか子どもの話を聴けないでいますが・・・）

そこから、どんな子どもの話を丁寧に聴くという受動的な態度で授業を進めるようになりました。このスタイルの変化はとてもつらいものでした。自分が話さず、子どもが話すのを聞き続けることはとてもつらく根気のいるものでした。そのスタイルを持って子どもに向き合っていくうちに、授業の中でこれまで聞くことができなかったような意見が聞けるようになり、手ごたえを感じるようになったのです。何よりもうれしかったのは、子どもの表情が穏やかになり、同じ場を共有している喜びを感じられるようになったことかもしれません。

“ともに泣き、ともに喜び、たがいに心をひとつにして・・・”

それが、どうして「子どもの哲学」になるのか？

国語の授業で、よく子どもの意見を聴きながら授業を進めていました。すると物語から離れるけれどもとても心揺さぶられる意見が子どもの中から出てくることがあったのです。その意見を元に話し合いをすると、国語の授業ではなくなるなと感じることがありました。

また、子どもの発言がつながるようになったのです。子どもは友だちの意見を聴くことによって、ある考えが浮かび、意見を話す。つながるということはどういうことなのだろうか？考えるとは？

授業をしながら、そんなことがとても気になっていました。

そんなことをあれやこれやと一人で考えていた時に、私のゼミの先生と久しぶりにお会いする機会があり、「こどものための哲学」について教えてもらったのです。その話を聴いた時に、直感的にこれだ！これをやってみたい！と思ったのです。そして、恩師が学ぶ場をつくってくださり、大阪大学の本間先生に引き合わせてくださったのです。本間先生は、“哲学カフェ”という実践を通して、様々な方々と対話をされてこられた一流のファシリテーターです。一人一人の発言を大切に聴くという姿勢は尊敬するものであると私は思っています。本間先生のファンである私はその技術を学びたいと同時にともに「子どもの哲学」の実践を積み重ねていきたいと願うのです。みなさんにとっても貴重な学びになることと信じています。

２００８年度　研推だより　　第４号
学びを創るあなたとわたし　―伝え合う力の育成をめざして―　　07.6.23

2008.2.9　とよなか国際交流協会における　　本間先生の講演記録の中から

こどものための哲学　Philosophy　for　Children（Ｐ４Ｃ）
- コロンビア大学哲学教授のマシュー・リップマンによって1970年代に提案され、始められた
- アメリカをはじめ、ヨーロッパや南米、アジア各国、オーストラリアなど世界各国で、対話型の教育、教科横断的な学習法や市民教育の一環として実践されています。

オーストラリアの小学校の取り組み

オーストラリアのクイーンズランド州にブリスベン市のビューランダ小学校では校長先生が「哲学は算数と同じように必要だから全員でやりましょう」と提唱し、すべての先生に週一回哲学の時間を義務づけ、教員どうしで内容や進め方を検討しています。

円になって話すのが基本スタイルです。こどもたちが円をつくり、その円の中に先生も入る。オーストラリアの場合は、たいてい２人で授業をされます。こどもたち２０人に対し２人です。日本と環境はまったく違いますね。一人が進行役をやり、もう一人が助けたり観察したりします。話されたことが時々紙に書かれて円のなかに置かれます。

授業は 1，2 年から始まります。いきなりディスカッション、議論といってもですね、大人たちにとっても同様ですが、そう簡単にできるものではないですよね。そこでいろんな絵本とか道具とかを使います。絵本を使う時もあるし、使わない時もあります。これは 1，2 年ですから、まだ母国語の英語を学ぶ途中なんですけども、こうやって３つの輪（フラフープ）を並べ、一つに「REAL」、真ん中に「？」、最後に「NOT REAL」と書かれた紙が置かれています。「リアルなもの」と「リアルではないもの」がどう違うのかについてみんなで話し合います。このように、「リアル」と「リアルではない」の違い、「友達」と「友達ではない」の違いについて、実際にいろいろなものを当てはめてみるのです。先生が「花はリアル？」と言いながら花を手渡すと、こどもは「どっちかわからない」と言って真中に置きます。同じように「ワニはリアルなの？」とワニのオモチャを手渡します。目的は議論することですが、言葉だけで議論するのではなくって、いろんなツールを使って工夫するのが特徴です。実は「リアル」とはどういうことかを考えることは難しいですよね。大人がやっても難しいと思います。今ここで私たちがこの同じテーマでやっても結構面白いかもしれません。あることが「リアル」であるとか「リアルではない」というときに、私たちはいったい何を区別しているのか、そのことについて話し合うのです。実際の様子を見ていると面白いですね。こどもたちが何を言っているのか分からないし、応答も最初むちゃくちゃです。こうやって断面だけ見ると、めちゃくちゃなことやっているように見えるかもしれません。とにかく１年生から、根気強く少しずつ積み重ねていくのがこのオーストラリアの方式です。まさか１年生のこどもが理路整然と、「造花はこういう理由でリアルじゃない」なんて発言しません。議論というより、もっとわけのわからないものなのですけども、でもこういう言葉のやり取りに慣れていって、やがて６年になったら自分の言葉で発言して議論することができるようになるのがこの学校の目標です。

このようにオーストラリアの場合は、プログラムがはっきり組まれており、週一回必ずすべての先生に対して自分のクラスで実施するという義務が課されています。そして、授業を公開し、先生どうしでこうやったらうまくいくというノウハウが交換されています。さらに、この学校のなかだけでなく、ほかの学校の先生たちが授業を見に来て、意見を交換し、自分たちの学校でさらに広げていきます。

オーストラリア、アメリカ、ヨーロッパでは、「多文化理解」が課題として掲げられ、小学校教育でも重要視されています。異文化、自文化をどう理解するか、自分たちと違うものについてどう考えどう受け入れるのかについて議論する機会がもたれます。例えば、日本の文化とは何かについて話し合うためには、「文化とは何か」について多少なりとも理解や議論が必要ですね。オーストラリアでは、「文化とはどういうものか」は哲学の授業で話し合うテーマの一つに数え入れられています。異文化理解の授業の一環としてこの「子どもの哲学」が使われているのは、オーストラリアだけではなく、他の国にも見られる特徴です。

２００８年度　研推だより　　第５号
学びを創るあなたとわたし　ー伝え合う力の育成をめざしてー

2DAYS 研究全体会の予定　みなさん！　ご予定ください。

25日(水)　研究全体会　15:00より　ランチルーム

ワークショップ　　ファシリテーター　本間先生

「おちば」(ｱｰﾙﾄﾞ・ﾛｰﾍﾞﾙ作「ふたりはいつも」）を読んでみなさんで話し合う。

26日(木)　研究授業　4･5校時　5年1組教室　研究全体会　15:00よりランチルーム

４・５校時　５年１組　金澤学級　総合的な学習　あなたとわたしで考えよう。「おちば」

※２時間研究授業をしますので、参観しやすい時間を選んでなるべく長く参観してください。

１５：００より　研究全体会　授業協議会　本間先生が司会をして会を進行されます。

※今回は、ビデオで撮影をしますが、録画した映像をみながらできないかもしれません。

「探求の共同体」　「探求する仲間」　(2008.2.9　本間先生の講演記録の中から)

哲学というと、とくに日本の場合、大学に入ってからしか哲学に触れる機会がありません。あっても高校の社会科の倫理くらいですね。倫理といっても、高校の先生方はいろいろ工夫されていますけれども、まだまだ知識習得偏重で思想・思想史を勉強することが中心となっています。思想史にしても膨大な知識の量です。いったん教える側に立てば分かることですが、これだけの内容をあの短時間でどう教えたらいいのかに困るくらい膨大な知識ですよね。知識を身につけることは意味があるとは思います。ですが一年間とか半年とかで一挙に覚えるというのは、自分で考えることにはなりにくいと思うんですよね。知識を増やすことから哲学に入っていくのではなくて、一緒に対話をするということをしながら、目標としては、自分で考えることを楽しむこと、それが哲学の実践です。自分で考える。自分で考えるっていうのは、面倒くさくて大変なことですけども、とても楽しいことです。

また、P4C では“community of inquiry”という言葉が使われます。「探究の共同体」あるいは「探究する仲間」という意味になります。これを象徴的に示しているのが、こどもと大人が円になって議論する姿です。知識を与えてこうしなさいというのではなく、絵本や物語を一緒に読んで、その内容について意見を言い合うのです。日本でもある「読み聞かせ」や国語教育と違うところは、ストーリーを正しく理解するとか、主人公になってどういう気持ちだったのかを推し量るとかではなく、勝手に自由に考えてよいことです。物語のある部分をとってきて、ここについてこう思うとどんどん発言しても OK です。ここが面白いと思うとか、こういう疑問を持ちましたという発言が出されたあとに、意見や疑問についてみんなで答えていきます。答えはテキストそのもののなかにはありません。答えはその場で共同で作っていかなければなりません。それが探究する仲間になるわけです。また最後に、みなさんどうでしたかという振り返りの時間が必ず設けられます。自分たちが話し合ったことについて自分たちは満足したのかついて、最後に話し合います。

このスライドの右に書かれているテーマ（存在、自由、自己、権利・正義、生と死）を見てください。こうしたテーマを背景としながら、いろんなストーリーを扱います。じっさい絵本はなんでもいいのです。よくできた絵本であれば、一冊のなかにいろんなテーマが含まれていますから、そのつど一つのテーマを取り上げ、去年はこのテーマで考えたけれど、今回はこのテーマで話し合ってみましょうというふうに何度でもできます。

「自分が好き？」というのも、心理学的に感情を捉えるのではなく、そもそも自分というものがどういう存在であって、どういうあり方をしているのかを考えるための問いです。自己、正義、権利という言葉は難しいですが、それを普段のちょっとした発言にひっかけながら、私たちはそれをどういうふうに実感しているのかについて考えるのです。死に関しても同じです。こどもであろうと大人であろうと私たちは何らかのかたちで死に触れているわけですけども、そういう普段あまり話合わないことについて、物語を通して、生と死という普遍的な問題についてそれぞれの仕方で考えていく。このように、日常生活に関係しながらも、その背景となっているテーマを体系だてて考えることが哲学の特徴かもしれません。

第５学年　総合的な学習指導案

金澤　正治

１．日　時　　２００８年6月２６日（木）　　４・５校時
２．対　象　　5年1組　男子１７名　女子１５名　計３２名
３．場　所　　5年1組教室
４．単元名　　あなたとわたしで考えよう　　「おちば」
５．ねらい
・自分の考えを自分の言葉で、ゆっくりていねいに話す。
・自分の考えの理由を話すことができる。
・対話を通して新しい考えを持つことができる。
６．指導にあたって

４月から、一人一人の子どもの話を丁寧に聴くことを続けている。自分の考えをみんなの前で話したいという意欲が感じられる子が増えてきた。しかし、まだみんなの前で話すことに抵抗を覚える子が多い。A さんのように、話すことを極端にさける子もいる。

A さんに対する私の２か月の取り組みをふりかえりたい。まず、一緒に遊んでみた。運動が苦手なA さんに、私がボールを投げると彼女がなんとかそのボールをうけることができた。その時、彼女は“にや”と笑った。「やったー、ボールとれたやん。」という友だちの言葉に、彼女なりの喜びを表現していることがわかった。家庭訪問で、お母さんから家ではえらそうに話をする A さんの様子を聞くことができた。遠足のお昼の時に、誰とお弁当を食べるのかを観察していた。友だちの言われるがままになってお弁当を食べるのかと思って見ていたら、自分の食べたい友だちに声をかけ、その友だちに話しかけながら楽しそうにお弁当を食べていた。観察を続けるうちに、彼女が私を信頼すれば、けっこう強く求めても大丈夫だという考えが持てた。そこで、勉強が苦手な彼女に声をかけ、休み時間に一緒に勉強する機会を多く持った。また、朝の会のスピーチでは、話すまでねばり強くまったり、手助けを行ってきた。しかし、クラスのみんなが見ている中で私が支援することは、いやだという思いが彼女から私に伝わってきた。

そこで、土曜参観にするスピーチ大会の練習は、班の友だちとともに進めることにした。１学期は、私が子ども達の様子から、班を決め、席替えを行っている。A さんにとって練習しやすい班のメンバーを考えて決めた。けっこうはっきり、ずばっと話しかける明るいB さんを班長として同じ班にした。男の子は、学習が苦手で不器用なC くん、やさしく落ち着いたD くんにした。スピーチ大会にむけて班の練習が始まった。練習毎に、班長に班の友だち一人一人の状態を報告させた。「A さんは、とてもしっかり練習して、がんばっています。」と、明るく大きな声でB さんが報告してくれていた。また、班の友だちのアドバイスを受け入れて練習する A さんの様子をみることができた。土曜参観のスピーチは、他の友だちと比べると内容も少なかったが、みんなの前でだまりこんでしまうこともなく、緊張しながらも話すことができた。同じようにKさんだけでなく、他の子どもについてもよく観察をし、手立てを打っていこうと考えている。

さて、今回は「おちば」という話から、自由に感想を出し、お互いの意見を聴き合う。一人一人の子が考えを持てるようにしたい。子ども達の話の流れから、“よい行い”と“幸せ”という二つのテーマにしぼっていく。また、単純で親しみやすい話なので、今のクラスの子どもにとっては、ちょうどよい教材と考える。

今回のような授業は、初めてなので、きっと A さんにとっては難しくて話についていけないことになるかもしれない。A さんだけでなく、他の数人の子にとってもとても困難な学習になるかもしれない。少しでも話ができるように、教師がどんな考えでもよいという安心感をあたえる態度でゆっくりとより丁寧に子どもの話を聴くことにしたい。また、話し始めて立ち止まってしまった子を、子ども同士で助けられるような支援をしたい。

一方、E くんやF くんのように自分の考えたことをみんなの前で話すことを楽しむ子もいる。その子達に十分に話す機会をつくる。彼らの話す姿とそれを受け入れ、聴く教師の姿勢を通して、他の子どもの話してみたいという

意欲を持つと考える。これまでの授業において、教科の特性を活かし、話し合い場面、説明する場面を、多く取り入れてきた。例えば、「同じ考えでも自分の言葉で、君の言葉で話してみて。」と繰り返し声をかけてきた。今回の授業でも、多くの子にその声かけをしてみたいと考える。

考えについて説明・理由を話すことができるのは、今のクラスの子どもでは、ＥくんやＦくんのように数人に限られる。今の段階では、うまく理由が話せなくても、一人一人の子に尋ね、話す機会をつくる。

今回の授業では、数人の子が話しを進めてしまうことになると予想されるので、班などの少人数で話す機会を持つことにしたい。班での話し合いは、話し合って何か結論を出すことはしない。身近にいる友だちに話し、言葉にすることで自分の考えをつくる機会とする。班での話し合いで、自分の語った考えを友だちが受け入れてくれ、認めてくれ、クラス全体の中で話そうという意欲につなげるように支援したい。

スピーチ大会の練習を通して、お互いを受け入れることができるようになってきている班での活動を通して、Aさんをはじめ子ども達が話している表情を観察する。

最後に今回の話し合う授業を通して、クラスの子どもがともに学ぶ仲間、探究の共同体としての関係を築くことを願っている。

７．本単元の計画（全２時間）

１時間目　「おちば」について自由に感想を出し合う。

２時間目　　テーマにそって話し合う。

８．学習活動

１時間目

学　習　活　動	指導上の留意点
１．「おちば」の物語をよみ、気づいたことを書く。	・物語をプリントして配る。一人で物語に向き合う時間をとることにより、考える時間を少しとる。
２．物語について、話し合う。	・最初は、あまり問いかけをすることなく、丁寧に話を聞く姿勢を意識的につくり、話しやすい雰囲気をつくる。 ・丁寧に聴きながら、問いかけを行う。問いかけに対する答えがすぐに子どもからでなくてもゆっくり待ってあげる。
３．班で話し合う	・班で話し合う時間をとることに、全体で話そうという意欲につなげたい。
４．全体で話し合う	・班の友だちの意見で、よかった考えをだせるように支援する。

２時間目

学　習　活　動	指導上の留意点
１．話すテーマについて話し合って決める。	・前時ででた意見を思い出しながら、話し合いたいテーマを決めていく。
２．テーマにそって話し合う。	・「どうして？」「例えばどういうとき？」「～こういうときはどうする？」等の言葉かけを行う。 ・子どもが言葉につまったら、「タイム」をとらせたりする。また、別の子どもに「続きを話してあげる人はいませんか。」と振ってみる。
３．ふりかえりをする。	・自分たちの話し合いについて、満足した部分と面白くなかった部分について、子ども一人一人の意見を聞く。

おちば　　名前（　　）

十月のある日、かえるくんは落ち葉でちらかった自分の庭を見て、がまくんの庭をこっそりそうじしてあげようと思いつく。

同じころ、がまくんもまったく同じことを考えていた。

それぞれ別の道を通っておたがいの家に行き、こっそり庭の落ち葉を一箇所に、かき集めて帰るふたり。

ところが帰路、風が吹く。

せっかく 集めた落ち葉は舞って、庭はもとどおり落ち葉だらけに。

授業記録

４時間目

全体テーマ　「わたしとあなたで考える」

□感想を言いあう（１１：４５～１２：０５）

・自分の思っていることと、他人の思っていることがいっしょだった。
・かえるくんもがまくんも、家に帰っておちばがどうなったのか心配しないのか？
・２人は仲が良い
・２人とも自分ではなく相手のことを考えている。
・自分が相手にしてあげたのに、風が吹いて元通りになってしまい、自分がやったことが相手に伝わらなくなってしまう。
・喜んでいるのを思い浮かべる。
・二人は似たものどうし、相手のことを先に考える。
・相手に自分の気持ちを伝える。
・二人は、相手のことを先にしているから、友だち思いだ。
・二人は（風が吹いておちばが元通りになっても）思っただけで幸せ。
・おちばを集めて仲良くなりたいと思ったのだろう。
・後で話をして知ったら悲しくなるだろう。
・喜んでいる顔を見たい。
・二人は絆が深い。

□班で話し合う（１２：０５～１２：１５）

班長が司会をする。

□全員で話し合う（１２：１５～１２：３０）

金澤「班で話し合ってことについて、話してくださ」

・二人は陽気だ。

・相手のことを考えていたから、帰りに風が吹いても（そのことに）気がつかなかった。
・自分は掃除はきらい。
・当たり前のように相手のことをやっている。
・（自分なら）あとで（庭が）きれいになったことを電話できく。
金澤「なぜ電話をするのか？」
・（自分なら）思い浮かべるだけでは気がすまない。
・こっそり覗きにいく。
→それではドロボウではないか？
→それなら、そうじしたこともドロボウと同じではないか？
・私は電話できないと思う。
・私なら直接会いにいく。
・自分の庭を見て（掃除してあげようと）思いついた。
・筆者が伝えたいことは、こういうことをしてあげてもバチはあたらないと思う。
・二人はどうして別の道を通ったのか？
→見つかったらコッソリ行くのがバレてしまう。
→コッソリそうじしたから、後で言わないと思う。
・自分ならコッソリそうじして、〜〜〜、友だちではなくなる。

１３時４５分〜１４時３０分（５時間目）

□テーマ別に話し合う
・電話・・（複数発言のため、書き取り不良）
・友だち気持ちは似ていても、やることは違うのかもしれない。
・自分のやつだけやっても〜〜〜、電話でコッソリ見に行ったりしない。
・言ったとしても、喜んでくれるかどうか分からない。
→「喜んでくれるか」とは？
・喜びを表すかどうか分からない。
・なぜほかのともだちのところに行かなかったのか？
→ほかの友だちよりも、一段と仲良しで信頼していたから。
→友だちのなかの友だち、信頼できる。
→親友だから会いたいと思った。
→仲が良い、兄弟みたい。
→「兄弟みたい」とはどういうこと？
→ケンカしたり、しなかったりするけれど、それだけ仲が良い。
→二人しかいなかった（話のなかにはない）
・二人は恩返しをした。
→（金澤）恩返したいからするのか？
→恩返しするならその日のうちにする。こういうことを毎日している。
→二人同時に恩返しできないのではないか。
→ともだちだから。
→いつか恩返ししたいと思っていた。
→恩返しとは？
→恩返し、やってくれたから返す。

→何もやってくれなくても人にやる。

（金澤）あなたは？
→落としたものひろってあげる。
→やってもらったからやる。

（金澤）ここから挑戦シリーズや。
・誰かにしてもらったら、やらなきゃと思う。
（金澤）いつもやらなければいけない？
・気持ち、気分による。やりたくないときもある。
金澤「気分って何？」
・・・・・(書き取りできず)
・誰かがやったのを見てする。まねする。した方がよいと思う。見て、自分もやってみたくなる。
・いいことをマネをしたくなる。
・やってもらったことを考えずに、うれしかった気持ちを考えてやる。
・「ありがとう」ということばをききたいから。みんな（ありがとうを）言ってくれる。
・自分からやる、やってもらっても忘れてしまうことがあるから。
・ありがとうと言われなくても、嬉しい気分になる。いつかことばが来るかも。でも来なくてもよい。
・自分のことより、やらなけらばならないことをやった方がいい。「ありがとう」と言われることはうれしいが、自分のためにも将来のためにもならない。
・「ありがとう」と言ってもらいたくない。「ありがとう」と言って、と（相手を）責めたくない。
・（自分が）幸せで満足しているのだから、「ありがとう」はいらない。
・（相手が）喜ぶことは当たり前だから、ありがとうと言うことを催促する必要はない。
・幸せを増やしたい。ずっと同じままではなく、何か起きた方がよい。出会った方が幸せ。（ありがとうを言いあった方がいい、ということか？）
→ちがう、自然にありがとうと言われた方がいい。その方が気持ちがこもっている。
→（金澤）気持ちがこもった「ありがとう」と、そうでない「ありがとう」は違う？
→「ありがとう」にもいろいろある。すごくいいことをしてもらったときの「ありがとう」／普通の「ありがとう」
→スーパーマーケットの「ありがとう」は不思議。
→店長など、影でなにかあるはず。

（金澤）最後に、「おちば」にもどって何か意見はあるか？
・友だちがほかにはいない。という意見があったが、いないわけではない。

□話し合いについての振り返り
・いろんな人の意見を聴いて、自分の意見が変わったり、考えたりして面白かった。
・いつもより発言ができてびっくりした。
・手をあげて、自分でもびっくりした。
・「ありがとうをききたい」という意見をきいてすごいなあと思った。

授業協議会記録から

本間先生の発言

○４・５校時を通して時間の流れがわかる。子どもたちの活発な意見

（前半）子どもたちが自分たち、それぞれの観点で発言→班の話し合い

（後半）テーマ　自分だったら電話して確かめる・・・会いにいく・・・など

進行役が「こういきましょう。」ともっとリードしてもよい。

今日の場合は、自然に流れていた。

一つ一つの発言について　　「この二人はとってもきずなが深い」

↓　　きずなって何なのか

言葉をピン止めする　出てきた言葉を確認して、個人から出てきた言葉を全員に返す

○５校時の流れ

いくつかのキーワードを選ぶ。選んだのは金澤先生

恩返し　　どういことか？

ありがとう　　言ってほしい。言ってほしくないか？

テーマがしぼられていた。物語を鑑賞することが目的ではなく、それぞれが１対１のやりとりはよかった。

○言いながら考えている。言ってから考えている。間を大切にする。生き物としての言葉の問題

「人が発言している時に手を挙げるな。」大事なこと。発言者に時間をあげる。対話の基本

「自分の意見を誰かに話せた」というのは大事なこと

○「自分のことより相手のことを先に考えるのは、友だちだ。」

事実　　意見

Ａ→Ｂを引き出す。　**推論**　６年生くらい

自分のことより相手のことを先に考えるのは、友だち思いなのか。いつもそうじゃない。ここからの広がり

○聴く力。対話を複数でするのはなぜか？１対１だと発想が閉じられてしまう。

テーマ、話題、広場、空間をつくることが大事。ほかの人が入ってこれる。

ちょっとななめ。距離のとり方。

短い発言の中にたくさんの意味がある。

でてきた言葉をひぱってみんなでつつくようにする。

・恩返しの２つの意味

・「ありがとう」　無償の気持ち。何かをやりたいという気持ち。

　・「ありがとう」と言われるからやるんじゃない。

　・気持ちのこもっていない「ありがとう」もある。

　・自分から言いたいから言うこと。言いなさいと言われるのがはずかしい。

２本間先生からの問い

〇一人一人の発言にのみこまれていく・・・・　教師としてはどう？

「聴く」というよりは、聴きながら進めている。次を見て、進めていこうとしている。

→（A 先生）この時間はこのめあての獲得するで、授業を組んでしまっている。話だけしよう。

という余裕がない。後から感じることはあるが、授業の中ではあまりない。

〇C さんから何を聞きとったのか。彼女が提起したことに対する反対意見。反対意見によって広がっていく。

→(金澤)この授業をするのは、二人で指導できるといい。一人でするのは難しい。聴いて、言葉を選び、授業を進めるのは配分が難しい。聴きながら進めるというのは難しい。

〇進行役はトレーニングをする必要がある。

こどもの哲学の授業は、進行役と意見を全部筆記する役の二人で行う。

スキルアップをして、対話の組み立て方につなげていく。

〇学校の中で、このような議論の方法は可能か？

→（B 先生）クラブ活動とかでは、いいと思う。教室にはいろんな子がいる。全て４５分はできない。いろんな子の気持ち（のってる子、たいくつな子、注意散漫・・・・）と考えると教室では、なかなかできない。

〇教員、教室の役割を考えると哲学カフェのような討論は無理。やってみることはできないのか？

クラブ・・・異学年　ＯＢ　教師　　教室・・・道徳　「感謝する」どいうことか。

このような場を設定することもできるのではないか。いろいろな文化を考える。職業、サービス、お金・・・などについて、話をすることはできるのではないか。

〇（松川）公教育としてやるべきことは？

→（B 先生）学習指導要領にものとって、力をつけないといけない。話をする。力をつける。・・・興味があるし、理想ではある。教科の中で、話し合いのある場面で、自分でも意識しながら、やっていきたい。

→（金澤）「生きる力」言葉を大切にする。・・・言葉で語るとはどういうことか？話し合いながら、分かりあっていかないといけない。

〇ハムスターの家を造りながら、話し合いをするということを子どもとした時に、

「話し合っても仕方がない。ムダやん。」という発言があった。

→（金澤）話し合うことの大切さ。楽しさを経験し、言葉を通してつながっていくのは大事ではないか。教科にしばられないで、話ができる子が多い方がいいのではないか。

〇保護者への説明。オーストラリア　ビューランダ小学校では、「こどもの哲学」の授業をすることにより、学習意欲の向上、学習意欲の低かった子が積極的に話せるようになった。テストの平均点が上がった。

→（金澤）今日も楽しく学習できたと思う。意欲も感じることができた。これからも、いろいろなテーマでやってみたい。お金、働く・・・・

他の学年でも、やってみたいところがあれば、声をかけてほしい。

→(教頭)おもしろい切り口の研究。昨日のワークショップでも自分たちが経験できた。今日それとともに金澤先生の研究授業。すぐに成果を求めるというより、深いところで耕せる研究であると思う。

授業を終えて

金澤　正治

２時間にわたって対話を通して学ぶという研究授業を行った。今回は、本間先生が、2 時間の授業を参観して下さった。4 時間目の授業が終わり、昼休みに 5 時間目をどう進めるかという指導をして頂いた。

『子どもの話を丁寧に聞くことだけを続けていてはいけない。もっと子どもの発言に立ち向かっていかないといけない。「それは、どういうことか？」など、子どもの使う言葉に対して、もっとこだわりを持ち尋ねることにより、話し合う課題をしぼっていく必要がある。』

研究授業の２時間目には、ご指導頂いたことを生かせるように取り組んでみた。

金澤「気分って何？」

・・・・・(書き取りできず)

・誰かがやったのを見てする。まねする。した方がよいと思う。見て、自分もやってみたくなる。

・いいことをマネをしたくなる。

・やってもらったことを考えずに、うれしかった気持ちを考えてやる。

・「ありがとう」ということばをききたいから。みんな（ありがとうを）言ってくれる。

・自分からやる、やってもらっても忘れてしまうことがあるから。

・ありがとうと言われなくても、嬉しい気分になる。いつかことばが来るかも。でも来なくてもよい。

・自分のことより、やらなけらばならないことをやった方がいい。「ありがとう」と言われることはうれしいが、自分のためにも将来のためにもならない。

ありがとうを言ってほしい。言ってほしくないか。というテーマで話をすることができた。子どもの発言が並んでいる。前の子の発言に、つながって発言がでている。→の意見は、反対の意見であり、対立を生む発言である。今回は、それを受け止め、子どもたちに返すことができた。

対立する２つの考えを区別することができ、その違いをしっかり子どもたちに意識させることを教師はしなければならない。２つの対立を子どもたちの考えをうみ、みんなで話し合うことにより、新たな考えを発見できる。

『聴く力。対話を複数でするのはなぜか？１対１だと発想が閉じこまれてしまう。テーマ、話題、広場。空間をつくることが大事。ほかの人が入ってこれる。短い発言の中にたくさんの意味がある。でてきた言葉をひっぱってみんなでつつくようにする。』

授業協議会で、本間先生は語っておられた。今回、一つのテーマについて話し合う広場をつくることが少しできたとのではないかと思う。

『言いながら考えている。言ってから考えている。間を大切にする。』

子どもが話している途中でこまってしまうと、間をおかずにすぐに発言を切ってしまうことがある。「考えをまとめてから話しましょう。」という指導をすることが多かった。

『言いながら考えている。言ってから考えている。』と本間先生に教えて頂き、これまでの自分の

授業で子どもの発言の聴き方、対応の仕方について改めて考え直すことができた。『言いながら考えている。言ってから考えている。』ている子どもの発言に対して、『間を大切に。』して対応していきたい。その姿勢を続けることが、対話を複数でする広場のような空間に教室をすることができるのではないかと考える。

また、今回の授業記録は本間先生がされて、後日送って下さった。その記録からみると・、→を使い、子どもの発言を２つに分けて記録をされている。子どもの発言のひとつ、ひとつについて評価をされていることがよくわかった。本間先生が記録をしながら評価されていることは、授業者である私が気づかないでいる話し合いのポイントを多くつかまれていたのではないかと想像する。本間先生が話し合うねうちがわかる、価値づけができる知識・経験を持たれているから、私が気づかないことがあるのは当然である。しかし、子どもの発言を受け止めることと、話し合いのテーマを絞って進行していくという２つの作業を同時に行いながら授業を行うことはとても難しいことと感じた。授業を進行役と監察役と２人でチームティーチングすることができれば、とてもよい学びができるのではないかと考える。

２００８年度　研推だより　　第６号
学びを創るあなたとわたし　―伝え合う力の育成をめざして―　　07.6.30

2DAYS 研究全体会　おつかれさまでした。

知識を増やすことから哲学に入っていくのではなくて、一緒に対話をするということをしながら、目標としては、自分で考えることを楽しむこと、それが哲学の実践です。自分で考える。自分で考えるっていうのは、面倒くさくて大変なことですけども、とても楽しいことです。

また、P4C では“community of inquiry”という言葉が使われます。**「探究の共同体」**あるいは**「探究する仲間」**という意味になります。これを象徴的に示しているのが、こどもと大人が円になって議論する姿です。知識を与えてこうしなさいというのではなく、絵本や物語を一緒に読んで、その内容について意見を言い合うのです。答えはテキストそのもののなかにはありません。答えはその場で共同で作っていかなければなりません。それが探究する仲間になるわけです。また最後に、みなさんどうでしたかという振り返りの時間が必ず設けられます。自分たちが話し合ったことについて自分たちは満足したのかついて最後に話し合います。

探究する仲間を目指して

金澤　正治

２日間にわたる研修会をやることができたことを感謝しています。１日目はとても多くの方がワークショップに参加下さり、楽しく議論できたことがとてもうれしかったです。２日目は、４・５時間の２時間の授業を参観していただきました。そして、事後の研究会では、とても勉強になりました。

しかし、事後の研究会では、みなさんにご意見を伺うことができない会の進行になってしまい申し訳なく思っています。そこで、授業を参観していただいた方にお話を聴いてまわることにしました。数人の先生と短時間対話させていただきました。とても貴重なご意見を伺うことができました。

「前任校で、道徳の研究をやっていた。子どもたちは、とても先生（金澤）の授業のように話すようになった。最初の道徳の授業をは、 なかなか本音を話さなくて、いい事を話そうと思う気持ちが強かった。でも、最後は話すようになった。今回の授業は道徳ともいえますね。しかし、最後はよりよい、高い価値にまとめることになります。それはしなくていいのかなと思いました。こどもたちの意見を板書しながらの授業は大変だった。記録して話を進めるのは難しい。子どもの意見をまとめて板書するのも難しかった。板書していると時間がたち、話がかわってしますことがあった。」

C先生

「私は子供意見をノートテイクしようとしたができなかった。 でも、本間先生達は、されていました。すごい。授業の中で、今回の授業の話し合いのような場面を自分もつくっていると思う。授業はねらいが大切だから、今回の授業のようなねらいでよかったのかな」　　D先生

まだ、数人の方としかお話をしていませんが、時間を見つけて多くの方と対話してみたいと思います。一対一の対話をすることは、とても大きな意味があると改めて感じました。しかし、時間がうまく取れないと申し訳ないので、感想を書く用紙を配ります。よろしくお願いします。

今回の授業は授業といえるのか？と感じておられる方もあると思います。しかし、授業がどうとかこうとかではなく。２時間の授業を通して、子どもの学ぶ姿を通して、授業の中で、「聴く」ことの大切さ、難しさを皆さんに伝えたかったのです。対話ある授業が、子どもの力を大きく育てること、探究する仲間のすばらしさを少しでも感じていただくことができのたのなら、幸いだと思います。

２００８年度　研推だより　　第８号
学びを創るあなたとわたし　―伝え合う力の育成をめざして―　　07.8.2

０８年６月２５・２６日　　研修会アンケート　まとめ

○研究授業を見ながら、自分のクラスではどうなるのかなぁ、あそこまで子どもたちが自分の意見を言えるかなぁと思っていました。「聴き合う教室」を目指して、子どもたちに自由に発言させるには私にとって勇気がいります。それは心のどこかに「子どもたちの発言を上手くつなげるかなぁ」とか「子どもたちの議論がこちらの目標と違うところにいったらどうしよう。」という考えがあるからだと思います。特に、今感じているのは「じっくり話を聞きたいけれども、時間がない」ということです。改めて、計画的に助行を進められていないことを痛感しています。学習指導要領が改訂され、どの教科を見ても「言語力の育成」という言葉が目に入ります。例えば、理科では「科学的な思考力・表現力等の育成の観点から、観察・実験の結果を整理し考察する学習活動、科学的な概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動を充実させる」という文があります。理科だけではなく、算数や社会にも教科特有の論理的な思考力や表現力の育成が重要になってくると思います。そのような力を身につけさせるという観点において、金澤先生の実践されている授業はとても参考になりました。ただ、学習指導要領が改訂に伴い、授業時数が増え、教える内容が増えるだけでなく、子どもたちの意見をじっくり聞ける授業を作っていきたいと思います。　　(E 先生)

○ワークショップでのグループは、女の方がファシリテーターのグループでした。みなさんの意見、感じ方がそれぞれ違うということを改めて実感し、私自身が話を聞きながら、いろんなことを考え、頭が痛くなるほどでした。いかに、普段あまり考えることなく生活しているのかを感じさせられました。“哲学”と“心理学”は多少似ているものを感じました。“哲学”も“心理学”も自分で考えるということ。カウンセリングをする時も、その人の話を聞き、すごく考えます。また、心で感じようとします。カウンセリングをした後の疲れに少し似ている気がします。“哲学”は“心理学”ほど心は使いませんが。　ファシリテーターをすることは、大変難しいことなのだろうと思います。１人１人が全くちがうことを言う中で、方向性が変わってしまうこともあります。その中で、きどう修正しながら、話がしやすい雰囲気、方向に導いていく必要性があるのかなと思いました。実際、金澤先生のファシリテーターで子どもたちがどんな様子や雰囲気で話しているのか、とても興味深いです。私はまだ１対１で話すことで精一杯です。それさえたくさんの子どもがいる学校現場では難しいと感じています。いつか力をつけて、する機会があるかは分かりませんが、ファシリテーターができるくらいになりたいなと思いました。本当にただ思ったことを並べただけの感想ですみません。　　(F 先生)

○もし、教育過程や説明責任やそういうものを排していいなら、私自身が田舎でまなんだような、ゆったりとした人と人との関係づくりを目指してもよいのだろうと思う。人として自分を深くほりさげたり、そういう支援をし

たりする教師の視点はとても大切だし、仲間がいてこそ有意義なものになる。「深く」も大切だし「広く」も大切だ。　(A 先生)

○１日目のワークショップでは、いろいろな先生の考えが聞けて楽しかったです。自分は発言しませんでしたが、内容だけでなく、発言するタイミングや人の意見との間のとり方等いろいろ考えさせられました。

(G 先生)

○子どもたちがあんなに深く考え、意見を持つことができていることに驚きました。一朝一夕では、できないことであるだけに日々の指導、継続を子どもを通してみせていただきました。子どもたちが「対話」を続けていくことで、その先に何があるのか、まだまだ漠然としたイメージしか持ててませんが、日々の指導の中で少しずつでも意識して実践してみたいと感じました。道徳の時間でじっくり聞く時間をとってみました。内容は低レベルなものばかりでしたが、気長に待ったらいろんな経験談が聞けました。少しずつでも力をつけていけたらいいなと思います。　(H 先生)

１日目のワークショップについて

あれこれと頭では考えるものの、やはり実際にやってみたらいろんなことが感じられ、とても有意義でした。考える、聴く、発言する・・・というひとつひとつの行動をする子どもが、どんな状態かを自分が体験することで、少しは気を配っていけるのではないか、と思いました。

２日目の研修会について

今の子どもたち（大人の我々も含めてですが)、自分の考えをことばにする、他人の考えを聴き、自分の考えとちがうか、同じか・・・などをすり合わせる、相手に伝わるよう表現する・・という力が不足していてそれをどうやってつけていくかということが世の中で期待されていることなんだと感じました。

明確にできないところではあるものの、それに向かって何かしていかないと思います。　(B 先生)

○哲学という言葉は、あまり身近ではありませんでしたが、校内研で、度々接することができて、楽しくて好きな分野だなぁと感じています。「考える事が楽しい」「考える事を楽しむ」というのが新鮮でした。

「おちば」は、短い物語の中に、人を思いやる優しさを感じることができ、ほのぼのとするすばらしい作品だと思います。と、同時に、つっこみどころ満載であるので行間にあるかくれた背景や心情を人それぞれ想像して、ぶつけ合うのがおもしろいですね。子どもたちも、それなりの今までに培った経験やら習慣や性格をもとにして考え、意見を述べ合うことができていて高尚であるのに入りやすい学問であるなぁと、又、一段と“おもしろさ”を感じることができました。ありがとうございました。　(I 先生)

○数年前、国語の授業を見ていただいた時、“美しい授業がすばらしいわけではない”と助言いただいた事を思い出しました。つまり私は発問に数人だけがこたえることに満足し、あたかも授業がうまくいったとかんちがいしていたからです。１時間の授業に数人こたえれば、流れていきます。けれど金澤先生のご提案の通り、みんなのつぶやきを待つことはとても大切だと改めて感じました。　(J 先生)

○ワークショップについて

金澤先生が提案されている「探求の共同体」「探求する仲間」対話することを通して“自分を考えることを楽しむ”という切り口で伝え合う力の育成にせまるという切り口がとてもおもしろいと思いました。実際にワークショップに参加してみて、自分が意見をいわなくても他の人の意見や会話を聞いて様々に思いをめぐらしている自分に気がつきました。しかし、話がだんだんと言葉で言葉をあやつるようになってくるとしんどかったです。

研究授業について

４月金澤先生が創って来られたクラス、一人一人との関係づくりの成果が表れている授業でした。先生の位置、子どもへの言葉が「教える人と教えられる人」ではなく、「共に学ぶ人」となっていました。そのような教室の雰囲気の中で、子どもたちはよく発言していました。ワークショップのときに、自分が体験したように発表しない児童も考えているのが伝わってきました。班での話し合いになったとき、それまでずっと聞く一方だった子が「わかった。わかった。」とつぶやき、友だちの言葉を借りながら言えたとき、この子は自分を表現することができたと思ったし、この瞬間が成長だと思いました。事後研をできるだけとってみなさんの意見を聞くようにし

たいです。何を題材にとりあげるのか、ファシリテーターがどのようにその場を展開していくのか等々奥が深いですね。でも、子どもに本当に「生きる力」がつくのではないかと思いました。他の学年でもぜひ取り組んでいるのを見たいし、これ（こどもの哲学）が〇〇小学校全体のとりくみとなると数年後が楽しみになると思います。子どもたちと「おちば」との出会わせ方、私なら　三木卓　訳のまま与えます。細かく読み取りをする訳ではないけれど、ホンモノをわたしたいです。　　（教頭）

☆授業の感想ありがとうございました。

②地区別人権研修会の取り組み　　第１・３・５学年の授業

第５学年　道徳（人権）学習指導案

指導者　金澤　正治

１．日　時　　２００９年1月２２日（木）　５校時
２．場　所　　５年１組教室
３．単元名　　「あなたとわたしで考えよう。」　－ともだちってなに？－
４．ねらい　　４－（ア）
　〇対話を通して、ともだちについての新しい考えをみつけることができる。
　〇自分と異なる意見を受け入れ、自分の考えを深める。
５．趣旨

・４月から、一人一人の子どもの話を丁寧に聞くことを続けている。自分の考えをみんなの前で話したいという意欲が感じられる子が増えてきた。しかし、まだみんなの前で話すことに抵抗を覚える子もいる。特に、A さんのように、話すことを極端にさける子もいる。そこで、土曜参観にするスピーチ大会の練習は、班の友だちとともに進めることにした。班は A さんにとって練習しやすい班のメンバーを考えて決めた。けっこうはっきりした口調で話しかける明るい B さんを班長とし、男子は学習が苦手で不器用な C さん、やさしく落ち着いた D さんの４人の班とした。スピーチ大会にむけて班の練習が始まった。練習毎に、班長に班の友だち一人一人の状態を報告させた。「A さんは、とてもしっかり練習して、がんばっています。」と、明るく大きな声でＢさんが報告してくれていた。また、班の友だちのアドバイスを受け入れて練習するＫさんの様子をみることができた。土曜参観のスピーチは、他の友だちと比べると内容も少なかったが、みんなの前でだまりこんでしまうこともなく、緊張しながら話すことができた。

　２学期の自然学校では、Ｋさんは班の友だちに冗談を話して、まわりの友だちをよく楽しませていた。「A さんはとてもおもしろくて、いろいろ話してくれるよ。」と同じ班の子どもが私に報告をしてくれた。笑顔で活動し、友だちの中で自分をだせるようになった。２学期の終わり、算数の時間にはじめて自分から手をあげた。「先生、A さんが手をあげているよ。」と気がつかないでいる私にクラスの子どもが教えてくれた。指名をすると A さんは、小さな声で答えを発表してくれた。また、飼っているねこのことを楽しそうに話してくれるようになった。

　A さんが話をするようになったのは、クラスの友だちが自分を受け入れてくれるという安心感が持てたからだと考える。つまり、クラスの子ども達の中に支持的風土が育ち、自分の思いを話しても友だちは受け入れてくれるという安心感を A さんを含め、クラスの多くの子ども達が持てるようになってきたのだろう。

・今回の授業では、内田麟太郎　作　降矢なな　絵　の『ともだちや』という絵本を取り上げる。

　お金をもらうことで友だちになってあげるきつねの話である。友だちになることでお金という対価を求めることはよくないという判断を子どもは下すだろう。しかし、「〇〇しないと仲間にいれてやらないぞ。」等のお金ではない対価を友だちから求められる経験を子ども達はしているかもしれない。友だちとは、対価をお互いに求め合うことによって成り立つ関係ともいえる。それを是とし、友だちは対価を求め合うことにより助け合っていると考えるのか。また、それを非とし、対価を求めることは友だちではないと考えるのか。実際の自分自身の友だちとの経験を照らし合わせながら、友だちについて話し合うことに適し、友だちについていろいろな角度から話をしやすい

題材といえる。

話し合うことにより、友だちに対する認識を深め、人に対する理解を育てることができると考える。言葉にするという作業は自分の内面を出すということであり、その作業を繰り返すことによって自分の内面を育てることになる。さらに、友だちの考えを聞くということは、自分以外の友だちの内面を知ることである。その気づきは、新たな考えをつくり、言葉にする作業を通して内面を変えていくのではないか。『ともだちや』を題材にして話し合うという対話の場によって、自分の思いを言葉に表すこと、相手の思いを聞くことより、コミュニケーション能力の基盤を育て、思いやりの心を培うことができると考える。

・『ともだちや』の絵本を読み聞かせるのではなく、あらすじをワークシートで用意をする。絵本では、絵に影響をうけるので、あらすじで言葉だけによる理解にしたい。国語の読解ではないので、読んで感じたことを子どもに自由に話させることで学習を進める。なるべく、先生が望む考えを話さないといけないというしばりを子どもに与えることがないようにする。そのために、教師がどんな考えでもよいという安心感をあたえる態度でゆっくりとより丁寧に子どもの話を聞くようにしたい。

自分の思いを意欲的に話すことができる子が数人いる。その子たちは、友だちの意見を聞くとすぐに意見を話すこともできる。そのために、話し合いがその子たちによって進んでしまうことがある。そこで、クラスの多くの子がついていけなくならないように気を配りたい。

６．指導計画（全２時間）

第１時（本時）　　『友だちや』を通してともだちとは何かについて考える。

第２時　　話し合いを通して、ともだちについての思いを深める。

７．本時のねらい

〇対話を通して、ともだちは何かについて考える。

８．本時の展開

学　習　活　動	指導上の留意点
１．「ともだちや」の話を聞いて、内容をつかむ。	・「ともだちや」の絵本の抜粋を読み聞かせる。子どもとの対話を通して内容を理解させる。
２．「ともだちや」の話しから、感じたことを自由に話す。	・正解を話さないといけないと身構えさせるのではなく自由に話せるように配慮する。 ・意見の対立を起こさせ、話し合いをもりあげる。 ・最初の読み聞かせた話から離れた意見も認める。
ともだちとは何だろう？	
３．課題について話し合う。	・発言はしなかったがよく話を聞いていた子どもにも尋ねてみる。
４．話し合いを通して、新しく発見したことを分かち合う。	・話していない子に順番にあて、話す機会をつくる。
５．今日のふりかえりを書く。	・机間巡視をして、支援をする。

９．授業の視点

・友だちについての考えを話せているか。

・友だちの意見を共感を持って聞くことができているか。

資料

『ともだちや』　　内田　麟太郎　作　　〈あらすじ〉

一時間１００円でともだちになってあげる「ともだちや」になることを思いついたキツネ。

「えー、ともだちやです。ともだちはいりませんか。さびしいひとはいませんか。ともだち　一時間　１００円　ともだち　二時間　２００円」

最初のお客は「ひとりぼっちの食事はつまらん」というクマだった。キツネは苦手なイチゴを一緒に食べ、２００円受け取る。

次にキツネを呼んだのは、オオカミ。

「おい、キツネ、トランプのあいてをしろ」

トランプはオオカミが３回勝って、キツネが１回勝ちました。

成果と課題

大勢の先生が参観される中、一人一人の子どもが自分の考えを話そうという意欲が感じられた。「友だちや」という教材が持つ力に驚かされる。この短い話から、子どもたちは様々な考えを発言する。教師である私と一人の子どもの対話から必ず授業は始まる。授業の始まりは、自分が話したいことを話す子どもと丁寧に対話を続ける。すると、話された意見に対する反論が出てくる。その反論に対する意見が出て、教師と一人の子どもとの対話から、子ども同士の対話となる。今回の授業では、Ｅさんが「オオカミはお金がなかったから、ごまかしてミニカーをあげた。」「ミニカーよりお金が大事」という意見に対して、多くの子が反対の意見を話した。対立をうむ少数の意見を大切にすることが話し合いを進める上でとても重要なことである。しかし、対立は自分の意見に固執するだけの言い合いにおちいることがある。Ｅさんは自分の考えに固執するようになった。その時に、教師が新たな切り口で問題提起をしていくことが必要になる。しかし、この問題提起が大変難しい。教材研究の質が問われることになる。今回は「お金」についてみんなで考えてみると話し合いが深まったかもしれないが、指導案では「友だち」というテーマにせまりたかったので問題提起をすることができなかった。また、時間配分ができなくて、話し合いをふりかえる時間を持つことができなかった。

この授業の後、話し合いをした。「本当の友だちと普通の友だちを区別して、差別をしてはいけない。」「友だちとは波をうっているみたい。最高と最低と気分がころころ変わる。」等の意見が出され、それに対する共感する意見や反論する意見が出され、幅広い考えを共有することができた。